

2021 年 4 月 25 日（日）「最終的な神の評価」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 9:1-3

- 1 私はこれらすべてを心に留め、明らかにした。すなわち、正しき者も知恵ある者も、彼らの働きは神の手の中にある。人は、愛も憎しみも、目の前にあるすべてのことを知ることはない。
- 2 すべての人に同じことが起きているにすぎず、一つの運命が正しき者にも悪しき者にも、善人にも、清い人にも清くない人にも、いけにえを献げる人にも献げない人にも臨む。善人にも罪人にも、誓いを立てる人にも、誓いを恐れる人にも臨む。
- 3 太陽の下で行われるすべてのうちで最も悪しきことはこれ、すなわち一つの運命がすべての人に臨むこと。生きている間に、人の子らの心は悪に満ち、無知に支配される。そして、その後は死者のもとへ行く。

《新改訳 2017》伝道者の書 9:1-3

- 1 まことに、私はこの一切を心に留め、このことすべてを調べた。正しい人も、知恵のある者も、彼らの働きも、神の御手の中にある。彼らの前にあるすべてのものが、それが愛なのか、憎しみなのか、人には分らない。
- 2 すべてのことは、すべての人に同じように起こる。同じ結末が、正しい人にも、悪しき者にも、善人にも、きよい人にも、汚れた人にも、いけにえを献げる人にも、いけにえを献げない人にも来る。善人にも、罪人にも同様に、誓う者にも、誓うのを恐れる者にも同様だ。
- 3 日の下で行われることすべてのうちで最も悪いことは、同じ結末がすべての人に臨むということ。そのうえ、人の子らの心が悪に満ち、生きている間は彼らの心に狂気があり、その後で死人のところに行くということだ。

【序論】

今日から 9 章に入ってまいります。8 章までを学んできて、本書の傾向がだいぶ掴めてきたのではないのでしょうか。コヘレトの思想は、いくつかのポイントを行きつ戻りつしながら、所々で逸脱する場面もありますが、螺旋階段のように一つの結論に向けて進んでいるのです。本書も残すところ四章となりましたが、「神なしの世界観」の追求は更に進んでいきます。無神論の限界が一枚一枚明らかにされていく。神なしに生き、審きを笑い、自分の人生が永遠とのつながりを持っていることを認めず、死によってすべてが終わると考える。そのような人生観・世界観に生きるころには、この世の不条理に対する解決がないことをコヘレトは教えているのです。

【本論】

本論 1. 未知なる神の審き

私はこれらすべてを心に留め、明らかにした。すなわち、正しき者も知恵ある者も、彼らの働きは神の手の中にある。人は、愛も憎しみも、目の前にあるすべてのことを知ることはない。(9:1)

冒頭の「これらすべて」とは、8:10 以下で語られてきた内容を指します。その内容を最も簡潔に表しているのは 8:14 でしょう。

悪しき者にふさわしい報いを正しき者が受け、正しき者にふさわしい報いを悪しき者が受ける。

この世にあつては物事のすべてが公平に取り扱われるということはありません。見ていてフラストレーションの溜まる現実がある。まずその事実を心に留めなくてはならない。確かに「正しき者」「知恵ある者」の働きは神の保護（神の手）の中にあるが、神が（地上において）その行ないに対してふさわしく報いてくださるかどうかは分からないとコヘレトは言います。

残念なことに、私たちは納得のいかない裁判の結果を涙を飲んで受け留めていかなくてはならないことがあるのです。そこで度々聞こえてくる言葉があります。「神がおられるならこんなにひどいことを放っておかれるはずがない」と。このように、神の存在そのものを疑うところにまで行き着いてしまう人が少なくありません。

「愛も憎しみも」とは、文脈で捉えるならば、「神の愛」「神の憎しみ」と理解できるでしょう。この部分は解釈困難ではありますが、恐らくこういうことが言われていると思われます。「現在悪人が栄えていたとしても、それが果たして悪人が神に愛されていることになるだろうか？」「現在正しい人が災いを受けていたとしても、それが果たして正しい人が神に憎まれていることになるだろうか？」。コヘレトが見ているところは物事の表面ではありません。彼の念頭には常に最後の審判があります。人は現在における評価や判決だけで物事を判断してはならないのです。

本論 2. どう生きてても訪れる死

すべての人に同じことが起きているにすぎず、一つの運命が正しき者にも悪しき者にも、善人にも、清い人にも清くない人にも、いけにえを献げる人にも献げない人にも臨む。善人にも罪人にも、誓いを立てる人にも、誓いを恐れる人にも臨む。(9:2)

「同じこと」「一つの運命」とは、まさしく「死」を表す表現です。どんな生き方をした人であったとしても、最後は必ず死ぬことになる。これは既に 2:14 で言われていたことです。

知恵ある者の目はその頭にあり、愚かな者は闇の中を歩む。だが私は、両者に同じ運命が訪れることを知った。

説教の冒頭でも申し上げましたように、本書では同じ思想が何度も形を変えて登場します。今日の箇所では「五つの対」によって、正反対の生き方をしている者たちに訪れる死の平等性が主張されている。ただ一つだけ「対」ではなく独立しているものもありますので、六つにまとめてみました。

- (1) 正しき者 × 悪しき者
- (2) 善人にも (※対になっていないもの)
- (3) 清い人 × 清くない人
- (4) いけにえを献げる人 × いけにえを献げない人
- (5) 善人 × 罪人
- (6) 誓いを立てる人 × 誓いを恐れる人

これらの対を更に整理すると、(1) (2) (5) は宗教的な要素なしに誰にでも適用されるものですが、(3) (4) (6) は宗教的な背景に基づく内容であることが分かります。ここでは特に「宗教的な背景に基づく内容」について考えておきたいと思いますが、興味深いことに、いずれもどちらが肯定的でどちらが否定的であるかを判断することが難しいのです。まず、「清い人」「清くない人」という内容は、「正しすぎてはならない」「悪に過ぎてはならない」(7:16) という聖句に照らして考えるならば、人の目を見た判断が神の評価と一致しているかどうかはまったく分からないと言えます。また、「いけにえを献げる人」「いけにえを献げない人」という内容も、イスラエルの歴史を見るならば、形式だけのいけにえを神が忌み嫌われたという内容が出てくるだけに(イザヤ 1:11 等)、その行為自体が評価の対象になるとはまったく言い切れません。更に、「誓いを立てる人」「誓いを恐れる人」という内容は、神に誓いを立てたら速やかに実行しなくてはならないという教えが背景にあります(5:3-6)。しかし、後者の「誓いを恐れる人」というのは、神に対して誓ったことを果たすのを躊躇^{ためら}うことを言い表しているでしょう。主イエスは「それなら誓うな」とまで言われました(マタイ 5:33-37)。これらのことから、誓いを立てるということそのものが良いことなのではなく、誓いを立てないことが良いことなのでもない。すべての行為に神に対する真実があるかどうか、最終的な評価の基準となるのです。私たちの奉仕が神に受け入れられるものであるかどうかは、分からない面がある。これは、この世のすべての営みにおいて言えることであります。

本論 3. 審きの遅延に伴う悪の増長

太陽の下で行われるすべてのうちで最も悪しきことはこれ、すなわち一つの運命がすべての人に臨むこと。生きている間に、人の子らの心は悪に満ち、無知に支配される。そして、その後は死者のもとへ行く。(9:3)

私はこの箇所を読んでいてピンときたことがありました。コヘレトが「死」をどんなに恐れ、憎み、受け入れがたい現実として捉えていたかということです。9:3においても「一つの運命」(死)が「最も悪しきこと」と言われています。いえ、より正確に言うならば、どんな生き方をしても全員が同じ「死」に至るということを、彼は「最も納得のいかないこと」として表現しているのです。

もしそうであるならば、悪が増長するではないか。審きが直ちに下らないから、人の心は常に罪に向かうのではないか。8:11でも同じことが言われていました。

悪事に対して判決が速やかに下されないため、人の子らの心は悪をなそうという思いに満ちる。(8:11)

ここで改めて「死」という事柄を整理しておきたいと思います。私は、聖書全体の思想から、死には肯定的な側面と否定的な側面の両方があると理解するようになりました。

まず、肯定的な側面と言いますのは、ある意味において死は現実の苦しみから人を解放するという意味があると思われるからです。もし「老い」に終わりがなく、永久に老い続けるのであれば、それほど悲惨な人生はないでしょう。また、死はこの世の労苦からの解放をも意味するかもしれません。

しかし、聖書的な思想に照らして見ると、死が持つイメージははるかに否定的な側面の方が強いように思われます。そもそも死は罪の結果として人の人生に伴うようになったと言われている。そして、その刈り取りとして人は死ぬことになる。死はこの世で培ったすべての功績や物質的なものとの別れの時となり、遺された者にも悲しみをもたらすことが多い。更に、時間が経てば忘れられていく。そして、究極的には死後に神の審きに直面することになると。

コヘレトがこれほどまでも死を憎むところには、彼の中にも死は本来人間存在に伴っていたものではなかったという理解があるように思われます。聖書の冒頭からのメッセージを受け留めている人であるならば、人間は本来神との交わりのうちに永遠に生きる者であったことを認めているはずです。しかし、アダムの罪によってすべてがおかしくなってしまった。この世の営みの一切を呑み込むものとしての「死」が人間一人ひとりの人生の終着点となってしまったのです。その逃れられない運命のゆえに、人の心には常に恐怖がまとうりついている。

しばらく前に、無教会派の高橋三郎先生が書かれた『ヨハネ伝講義』という本を読ん
でおりましたら、人間が無意識的に死を恐れる理由について、このように書かれていま
した。

「われわれの生存に対する最大の脅威は死であるが、死に対してわれわれが本能的に抱
く恐怖は、実はその背後にひそんでいる『神の審き』に対する恐怖にほかならない。」

(上 p. 328)

この問題を解決することが聖書のゴールです。コヘレトが言っていることも、逆説的な
語り口ではありますが、それによって読者に死の問題に目を向けさせ、では人は何を信
じて生きるべきかを教えようとしているのです。

【結論】

死の問題を解決していく鍵は新約聖書にあります。旧約聖書では、神を畏れ、神と共
に歩むという一つの答えが与えられていますが、最後の審判や永遠のいのち、新天新地
などについての教えは十分には語られていません。主イエスが来られ、人が罪から贖わ
れる道が開かれなくてはなりません。十字架の血潮によって私たちの罪が赦され、
死んでも生きる存在になるという約束を受けなくてはならなかったのです。

**イエスは言われた。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生き
ていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。」**(ヨハネ 11:25-26)

コヘレトの言葉は新約の光を待ち望んでいます。永遠の世界における神の審きが存在す
ること、そこでこの世で行なわれた一つひとつの営みに対する正しい評価がなされるこ
と、そして信じる者は「罪赦された者」として神の御前に出られること。「太陽の下」
すなわち「神なしの世界観」の絶望から解放する道を指し示しているのです。

【祈り】

人の心を見られる神よ。私たちは自分の心に潜む不純な動機を知っています。いえ、
自分では正しいと思ってやっていることが、神の目には穢れたものと映っているかもし
れません。自分では自分自身さえも正しく評価することができないのです。それゆえに、
最終的な神の評価がどのようなものになるか、人は恐れながら生きています。しかし、
あなたはそこにすべてを覆って余りある解決を与えてくださいました。それは、神の恵
みに依り頼むという道です。この道を成就してくださった主イエスを私たちは信じます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人からの評価ではなく、神からの評価に目を向けさせ給う、父なる神の愛、

すべての事を行なうときに、純粋な神への愛を動機とさせ給う、主イエス・キリストの恵み、

死後に臨む最後の審判を見つめ、イエスの恵みに依り頼ませ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。